The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	協働で作る文法コロケーションハンドブック : コーパスの授業成果を発信する
Author(s)	中俣, 尚己; 清水, 由貴子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2025, 29, p. 31-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

協働で作る文法コロケーションハンドブック
── コーパスの授業成果を発信する ──

中俣　尚己*・清水　由貴子†

要　旨

本実践報告では、中俣(2014)『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』をベースとした拡大版・電子版の文法ハンドブックを日本語教育学を専攻する大学院生の協働で製作する試みについて報告する。具体的には、大学院でコーパスの使い方を学ぶ授業の演習部分として、１人１項目の執筆を課すというものである。従来、授業内の発表やレポートとして行われていた課題を直接webで公開することで、大学院生としてはより真剣に課題に取り組むようになるとともに、その成果物を業績としてカウントすることも可能になる。また、直接的な社会貢献が難しい文法研究における社会貢献という側面も重要である。

【キーワード】 コーパス、文法ハンドブック、協働、大学院教育、研究成果の公開

1　はじめに

この実践報告は、筆者らがそれぞれの勤務校で実施しているコーパス日本語学の授業についてのものである。その要点は大学院生がコーパス日本語学の授業で学んだ学習成果を、日本語学習者むけの文法解説書としてまとめ上げ、インターネットでそのまま全世界の日本語学習者、日本語教育関係者にむけて発信するという試みである[1)]。

コーパスを用いた文法解説書のフォーマットは筆頭著者である中俣が2014年に出版した『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』(中俣2014, 以下「ハンドブック」)をベースにしている。同書には初級文法項目95が収録されており、初級の授業準備には大いに力を発揮するが、上級までを視野に入れるとこれだけの数では足りない。例えば文法解説書のベストセラーとも言えるグループ・ジャマシイ(2023)『日本語文型辞典　改訂版』にはおよそ1,000の文法項目が収録されている。しかし、グループ・ジャマシイ(2023)が協働作業で生み出されたように、この規模の文法解説書は独力で生み出すのは困難である。そこで、筆者らは大学院でコーパス日本語学を学ぶ学生の授業内の活動としてハンドブック記事の執筆を行うことを考え、実践した。

この実践報告では2023年度、2024年度の実践報告を行うとともに、2025年度以降さらに規模を拡大し、オンライン版文法コロケーションハンドブックを構築、公開していく構想についても述べる。

2　文法コロケーションハンドブック

2-1　これまでの歩み

「ハンドブック」の企画意図や執筆過程については中俣(2012, 2017)で詳述しているため、ここではその概略を述べるにとどめる。

本書を一言で説明するならば、日本語教育の初級コースで扱われる主な文法項目（動詞が接続しうるもの）に対して、その前にどのような動詞・形容詞・名詞が接続することが多いかということを、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のデータとと

*　大阪大学国際教育交流センター准教授
†　聖心女子大学現代教養学部日本語日本文学科准教授

もに示したものである。「コロケーション」とは「共に使われることが多い語の組み合わせ」を意味するが、従来のコロケーションの研究では「本を読む」のような「名詞＋動詞」や、「濃いコーヒー」のような「形容詞＋名詞」に焦点が当てられることが多かった。中俣(2014)ではこれを「実質語＋文法形式」というパターンにまで拡張し、「文法コロケーション」と命名した[2)]。

表1　コロケーションハンドブックの例（てみる）

順位	動詞	出現数	%	教科書に多い動詞	順位／3,221
1	考える	4,605	7.50%	使う	11位
2	する	3,685	6.00%	読む	12位
3	見る	3,051	4.97%	食べる	17位
4	聞く	2,677	4.36%	出る	36位
5	やる	2,418	3.94%	頼む	87位
6	行く	2,306	3.75%	説明する	103位
7	調べる	1,799	2.93%	着る	105位
8	言う	1,529	2.49%	はく	188位
9	試す	1,204	1.96%	来る	283位
10	作る	964	1.57%	かぶる	449位

「ハンドブック」の実際は表1に示した通りである。これは「てみる」の項目の表を引用したものである。表の左半分にはBCCWJを調査して得られた、その文法項目に前接することが多い動詞を10個、出現数と全体に占める割合とともに掲載している。表の右側は7冊の初級教科書を調査し、多く現れた動詞を10個、その動詞がBCCWJの調査で何位だったのかとともに掲載している。表1では省略したが、全体的な出現数や生産性の高低も同時に示している。表の後には、動詞ごとの使われ方の特徴、多く現れるパターンの例文（作例）、後続の形、レジスター（使用されるジャンル）、複数の用法を持つ場合の各用法の割合といった情報を収録している。基本的な機能の解説や接続に関する情報も掲載されている。

2-2　その後の展開と残された課題

「ハンドブック」は初級で扱われる文法項目を中心に95項目を扱っているが、初級を選んだのは端的に言えばニーズが多く、売り上げが見込めるためである。しかしながら、初級文法項目は「から」「たり」のように様々な動詞と接続するようなものも多い。前接する動詞に大きな偏りがあり、よく使うパターンを覚えることの重要性が高いのはむしろ中上級項目であろうということは計画の最初の時点から意識していた。

そこで、「ハンドブック」の原稿を書き上げてすぐに、筆者は文法研究者を集め、中上級項目を扱った続編の製作にとりかかった。それが中俣(編)(2017)であった。しかしながら、中俣(編)(2017)は論文集シリーズのうちの1巻という体裁で執筆されたため、読みやすさは中俣(2014)に劣ること、また10人で合計119項目を執筆したとはいえ、それでも中上級項目全体から見ればごく一部にすぎず、扱い切れなかった項目が多いという弱点も抱えていた。

さらに網羅性を高めたコロケーションハンドブックを作る必要があると考えていたが、10人の研究者でも実現は難しく、製作体制を見直す必要があった。研究室の大学院生のプロジェクトとして、より工業的に記事を「生産」していく必要があると思われたが、当時、筆者は大学院ゼミをもっておらず、この計画は実現できなかった。

一方で、筆者は2012年から、「ハンドブック」を作る際にも利用したコーパス検索ソフト「中納言」の活用方法の授業を行っている。その内容も、筆者が「ハンドブック」を製作した時の経験を元にしているため、いわばこの授業の受講生はハンドブックの項目を作成するのに必要なスキルをすべて身に着けることになる。さらに、2021年には授業用の教科書として中俣(2021a)を上梓し、また折からのコロナ禍への対応として解説動画もYou Tubeに公開した[3)]。そこで、これらのコーパス日本語学の授業の受講生が、授業内の成果物としてハンドブックの項目を執筆するというシステムを考案した。院生の協働によってつくられるこの新しいハンドブックを『文法コロケーションハンドブックE』と命名した。「E」は、Expanded（拡大版）のEであり、Electronic（電子版）のEである。

そもそも、コーパス検索は言語学的なデータを集める手段に過ぎない。そのため、これまでの授業でも必ずコースの前半でコーパスやエクセルの使い方を学び、後半は学んだことを使って自分で研究課題を設定し、発表を行い、最後にレポートを執筆するという流れであった。しかし、この研究課題は受講生の自由に任せていたため、個人によって取り組み

の熱心さに差があった。また、レポートも単に成績評価のために書かせていたにすぎず、数千字のレポートは教員以外の誰の目にも触れることはなかった。

そこで、課題を「ハンドブックの、未執筆の項目を執筆する」という具体的なものにし、さらに成果物を清書後、全世界に向けて公開することで、学生が課題に取り組むモチベーションを高めようと考えた。大学院生には世界中の未来の学習者があなたが書いた記事を読んで、日本語を勉強するかもしれないと伝えることにした。

3　大学院におけるコーパスの授業と成果発信

3-1　授業シラバスの例

授業シラバスの例として大阪大学の2024年の春夏学期の内容を表２に示す。最終的な受講生は８名であった。

表２　授業シラバスの例

1	ガイダンス・ コーパスとは何か	対面講義
2～7	中納言の操作	オンデマンド
8	ハンドブック執筆時の注意点	対面講義
9～12	第一次原稿　チェック	対面ゼミ
13～15	第二次原稿	対面ゼミ

第2回から第7回はオンデマンド形式で、学生は教科書を読み動画を見ながら手を動かし、ワークシートの課題を提出する。合わせてコーパスを使った論文を週に１本読み、オンラインフォーラム上でディスカッションをする。具体的な質問や相談がある場合のみ、授業時間に教室に来て質問することができる。対面授業で８名がコーパスを操作するとなると、入力ミスなどに伴うエラーが必ず発生し、思ったように進行しない。そのためにオンデマンド形式を採用している。しかし、論文についてのディスカッションは対面の方が効果的という感もある。そこで、2025年度は、事前に動画や課題を行い、授業時間はまず疑問点の質問を受け付け、続いて論文のディスカッションを行うという方式に変更することを考えている。

第８回の執筆のためのガイダンスを経て、学生は二度原稿を書く。後述するようにわかりやすい記述をするためには、大勢の目で二度議論することが必要であると考える。第一次原稿については１人あたり45分程度の時間をかけて問題点を洗い出す。一方、第二次原稿は、それらの問題点が解消されたかを確認する場なので、１人あたり最大30分、場合によってはより短い時間で終わることも多い。二度のチェックを受けた後、さらに最終版と、著作権の譲渡契約書を提出することが最終課題に相当する。

3-2　これまでの実施と成果の発信

さらに、これらの活動の前半部分は教科書・動画・ワークシートという形でパッケージ化されており、後半部分も執筆マニュアルを整備すれば、筆頭著者以外の大学でも可能ではないかと考えた。大学の枠を超え、共通の授業プロラグムを実施することで、巨大な成果物を作ることが可能になる。この考えに賛同してくれた共同研究者のおかげで、2024年度の時点で、４大学において授業を実施することができた。なお、これまでの実践は全て博士前期課程の１年次に行われている。

表３　これまでの実践

時期	実施期間	項目数
2023前期	大阪大学	5
2023後期	聖心女子大学	3
2024前期	大阪大学	8
2024前期	一橋大学	7
2024通年	聖心女子大学	2
2024後期	神戸女学院大学	5
合計	4機関	31

成果は各学期が終わったタイミングでwebで公開している。最終的にはブログ形式なりwiki形式なりで公開することを考えているが、扱っている項目数が少ない段階では寂しくなると思い、まずは「ハンドブック」のデザインを参考にしたフォーマットを作成し、PDF形式で公開を行っている。2024年度時点で31項目となり、すでに「ハンドブック」の1/3程度の分量になっている。今後はブログ形式に移し、さらに規模を拡大させていく。

3-3　予測される効果

大学院生によるハンドブックの項目執筆の予測される効果としては、まず学生にとっての教育的効果

が挙げられる。提出後、教員しか読まないレポートではなく、「教材」として全世界に公開されるハンドブックの項目を執筆するということは、書き手にとってプレッシャーがかかり、レポートよりも真剣に取り組まなければならないという姿勢を生む。

また、ハンドブックは世界中の教員や学習者が利用するものであり、必ずしも専門家が利用するものではない。そのため、言語学の専門用語を羅列するだけでは良い記事とは言えず、学習者にわかりやすく説明するにはどうすればよいかということを考える必要がある。日本語教育系の講座でコーパス日本語学の授業を受講する学生は、将来日本語の授業を担当する可能性は高く、その際に必要となるスキルを学ぶ機会にもなっていると言える。

見方を変えれば、授業の成果物を社会に直接発信することは大学の社会貢献の一例ということができる。特に、直接的貢献がなかなか難しい文法研究において、成果を直接利用可能な形で発信することの意義は大きい。

さらに、大学院生のキャリアの視点からはM1の時点で業績を作ることができる点も大きい。特に、M2前半の時点で日本学術振興会のDC1に応募しようとする学生の場合、査読付き論文を用意することはなかなか難しい。本プロジェクトはかならず執筆者の名前をクレジットすることで、そのような申請にも役立つ業績を作ることを企図している。もちろん、必ずしもすべての学生が博士後期課程に進学するわけではないが、そのような学生にとっても、自分が大学院に属し、研究したことの証を、公的な形で残せることは意義があるのではないかと考えている。さらに、ポートフォリオとして利用することも可能である[4)]。

4　実践報告

4-1　大阪大学における実践

大阪大学では2023年度春夏学期と2024年度春夏学期に実施した。2023年度の受講生は4名の博士前期課程の学生のほかに、3名の博士後期課程の学生が聴講生として参加していた。うち2名は自身の研究の忙しさから執筆を完成させることはできなかった。

この学期は初めてということで特に指針といったものはなく、ただ「ハンドブック」を授業内で分析し、それを真似て作成した。どのような情報を載せるか、レイアウトをどうするかはこの授業のメンバーでディスカッションを行い、決定した。以下に示す項目は必須とし、それ以外の項目については、任意とした。

- 基本的意味
  - 接続
  - 表現（具体的な接続の形）
  - 簡単な解説
  - 用法ごとの例文
- 前に来る語
  - 前接語の上位10語を表形式で示し、頻度と%も示す。
  - 総出現数
  - 上位10語の割合
  - 生産性指数（中俣2015）[5)]
  - 簡単な解説
- 例文（用法が複数ある場合は分ける）
  - 簡単な解説
- レジスター
  - 4つのコーパスにおけるpmw(Per Million Words)のグラフは必須。それ以外の分析は任意。
  - 簡単な解説

単に内容を決めるだけでなく、どのように書くか、レイアウトも含めて決定した。この時に決めた内容をテンプレートとし、以降の学期の実践でも使っている。レジスターについては、中納言上ではすべてのコーパスにおける調整頻度がpmwで表示されるが、一般の利用者にはコーパスの略称や名称がわかりにくいため、『日本語日常会話コーパス(CEJC)』→「会話'10年代」、『名大会話コーパス(NUCC)』→「会話'00年代」、『日本語話し言葉コーパス(CSJ)』→「独話」、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』→「書き言葉」のようにわかりやすい名称を考えた。

また、生産性指数はその文法項目がどれほどの実質語とともに使われるかという指数になるもの(中俣2015)であるが、ある一つの項目の生産性指数がわかったとしても特に授業で役に立つことはない。しかしながら、様々な項目の生産性指数を計算して記録しておくことは、今後の研究の礎となると考えられるため、これのみは編者の意向として必須項目とした[6)]。

2023年度は最初の学期であることから、わかりやすい解説を書くために授業終了後にもさらに数回、筆頭著者とやりとりを必要とした学生もいた。その一方で、4月までコーパスを触ったことがなかった学生が、中俣の「ハンドブック」と比較しても遜色ない、興味深くわかりやすい執筆記事を書けたケースもあり、この手法に自信を深めることができた。

2024年度の実践では、すでに他大学での実践も始まっていたこともあり、マニュアルを整備した。このマニュアルには、例えば「この本ではできるだけ簡単な用語を使って説明します。「事態」のような難しい言葉は使わず「出来事」のような簡単な用語を使ってください。「従属度」とか「順節確定条件」のような専門的な用語は使わないでください。」のような記述がある。これは「ハンドブック」の時からの方針であり、「やさしい日本語」とまでは言えないが、専門用語ではなく日常的な用語で解説することを目指している。

また、例文については中俣(2023)を参考に以下の五か条を明示している。

1.「有り得るシチュエーションでなければならない」
2.「文脈から文体を考える」
3.「ジェンダーロールの固定化に加担しない」
4.「当たり前のことを言われても面白くない」
5.「データを調べればわかるようなことを空想で述べない」

例文作りは筆者が「ハンドブック」執筆時の時にも最も苦労した箇所であり、コーパスの実例を元に、それを教材用にわかりやすく短縮することで作る方法を提案している。実際、母語話者がコーパスの用例を見ないで作った例文より、非母語話者がコーパスの用例を改変して作った例文のほうが、より生き生きとわかりやすいものになることが多かった。

さらに、執筆前に読むべき文献リストも用意した。

1. 中俣(2014)：ハンドブック本体の一部を読むように指示した。
2. 中俣(2015)：生産性指数についての解説。
3. 中俣(2017)：「ハンドブック」の執筆に至った背景を書いている。
4. 中俣(2021b)：パーセントの表記法についての解説。
5. 中俣(2023)：上記の例文作りの五か条について。

2023年度までは、「ハンドブック」以外から学習者が好きな文法項目を選んで書いてきたが、翌年度からは項目の重なりに注意しなければならない。そのため、Googleドライブ上にシートを作り、『日本語文型辞典　改訂版』の項目を入力、担当者の名前を早いもの勝ちで記入していく方針をとった。これにより、複数の機関で同時にプログラムを進めることができる。なお、上述の執筆マニュアルと文献リストもGoogleドライブで共有している。

このようなマニュアル化を進めたためか、2024年度の執筆は2023年度と比べると順調に進み、「直し」が少ない記事が多かった。マニュアル化を徹底することで、授業実施機関が異なってもある程度クオリティの揃った記事を執筆することが可能になると考えられる。

最後に、2024年度の参加者の声の一部を紹介する。

表4　授業後の大学院生のコメントより

コーパス研究として気をつけるべきことに加え、日本語教材作成として気をつけるべきことを多く学ぶことができ、貴重な経験になりました。文法研究、コーパス研究の成果として出てきたものを、どのように教材に還元するかということは、思っていたよりも難しい部分があり、悩んだところもあったのですが、実践を通してその考え方や手法を少し学ぶことができたように思います。
ハンドブック記事作成はコーパス学習の成果検定みたいで、コーパスのいろいろな知識を活用する上で、文法項目の解説とかを作成することができて、すごく面白いと思います。
ハンドブックの記事を作成するとき、分析結果が文法辞書と異なることが時々あります。また、実生活でよく使われるパターンと教科書に載っているパターンが異なることもあります。このような大きな違いに驚くと同時に、コーパスやビッグデータの魅力を感じました。
学習した内容を実際に応用することで、学んだ内容の理解がより一層深くなりました。そして、先生と皆さんの指摘によって、不足点を発見して、将来自分の量的な研究に役立てると思います。

授業参加者たちは前半で学んだコーパス調査の知識を、ハンドブック執筆を通して、確認していることがわかる。また、日本語教材作成をすることやそのために他の参加者とディスカッションをすることについても肯定的に評価していることが伺える。

4-2　聖心女子大学における実践

聖心女子大学では2023年度の後期、2024年度の前期・後期に実施した。ここでは2023年度後期と、2024

年度前期の実践について報告する。

2023年度後期の受講生は3名の博士前期課程の学生であった。このうち1名はコーパス検索の経験が少しあったが、後の2名はコーパスに触れること自体が初めてだった。そのため、中納言を使ったコーパス検索の練習と、検索結果の見方や分析のしかたについて前期の中頃から練習し始め、後期になってからこのプロジェクトに取り組むことにした。大阪大学での実践の状況を受け、聖心女子大学でも大阪大学と同じテンプレートを用いて執筆することとした。2023年度後期の授業シラバスを表5に示す。

表5　聖心女子大学での実践（2023年度後期）

1	ガイダンス	講義
2～11	コーパスを使った論文の講読とコーパス検索演習（2～3回ずつ交互に）	演習
12	ハンドブック執筆時の注意点	講義
13	第一次原稿　清水チェック	演習
14	第二次原稿　中俣チェック	オンライン

2023年度はコーパスを利用した日本語研究の授業の中に、急遽このハンドブックのプロジェクトも組み込む形でシラバスを修正した。学生の負担を考慮し、この授業のレポート課題とハンドブックの原稿作成を兼ねる形で、授業のレポート課題として書いた内容を、ハンドブックのテンプレートに整えて提出することを求めた。具体的には、レポート課題では詳細な検索方法・検索結果・分析などをWordファイルにまとめ、その後、完成したレポート課題から必要な情報を抜粋して、ハンドブックのテンプレートに流し込む、ということを想定していた。しかし、この完成したレポートからハンドブックのテンプレートに落とし込むという作業が思いのほかスムーズにできず、何度もやり直しをした。特に、必要な情報の取捨選択が難しかったようである。レポートの課題として必要な情報と、ハンドブックに必要な情報は同じではないからである。この経験から、ハンドブック執筆の際は最初からテンプレートに文章やデータを入力していき、完成版の情報の量と内容を意識しながら体裁を整えていくのが効率的だと痛感した。この点は初年度の反省点の一つである。

もう一点、この年に感じた困難点は、日本語学習者の参考になるようなわかりやすく適切な例文がなかなか作れない、という点であった。どのような例文が役立つかがうまくイメージできない、あるいは、よい例文を作ろうと考えすぎてしまい、結果的に不自然な例文を作ってしまうこともあった。例文作りには慣れとテクニックが必要であり、苦戦するポイントであるため、今後、必要に応じて「例文作り」に特化したレクチャーも行ったほうがよいと感じた。

2024年度の受講生は2名の博士前期課程の学生であった。2名とも中納言でのコーパス検索の経験が多少あったことから、2024年度は前期のうちからこのプロジェクトに取り組むことにした。2024年度前期の授業シラバスを表6に示す。

表6　聖心女子大学での実践（2024年度前期）

1	ガイダンス	講義
2～12	コーパスを使った論文の講読とコーパス検索演習（2～3回ずつ交互に）	演習
13	ハンドブック執筆時の注意点	講義
14	第一次原稿　清水チェック	演習

2024年度前期は、この授業のレポート課題＝ハンドブックの原稿作成とし、最初から原稿のテンプレートに書き込む形で執筆させた。一方、これまでこの授業のレポートで書かせていた詳細な検索方法・結果・分析はテンプレートには書かず、「第一次原稿チェック」の際に口頭で追加説明させるようにした。その結果、前年度よりも第一次原稿の直しが格段に少なくなった。なお、本論文執筆時点では、第二次原稿のチェック（中俣チェック）は後期にオンラインで行う予定である。

2023年度後期と2024年度前期の実践を通して、気付いたことが二つある。一つは文法項目によって検索のしやすさや結果のまとめやすさが異なり、作業工程や時間に大きな差が出る点である。例えば、「をこめて」のように名詞にしか接続しないものもあれば、「といっても」のように名詞や動詞だけでなく文にも接続し、さらに用法も複数あるものもある。教員としては後者のような項目にもぜひ挑戦してほしいと思うが、上記のような違いもあるため、担当項目を決める際は、接続する語の品詞や用法の数などを予め調べてから選ぶよう助言するとよいと考える。もう一つは、検索結果の解説が細かく複雑になりすぎないようにする点である。特に、文法を専門に研

究している学生はこの傾向があるため、ハンドブックの趣旨に合わせ、書くべき情報を自分で取捨選択できるよう指導する必要がある。

今後は、これまでの実践での反省を踏まえ、学生が積極的に取り組めるように授業を工夫し、効率よく作業が進められるようにしていきたい。

5　今後の展開

3-2で述べたようにこれまで複数の大学院の授業として、ハンドブック記事の執筆を行ってきた。しかし、あるシンポジウムで筆者がこの取り組みについて話した際に、「自分は大学院生ではないが、参加してみたい」という声を複数頂いた。そこで、今後は授業参加者だけでなく、過去の授業に参加した学生や、その他一般の日本語教育関係者にも参加してもらおうと計画している。

授業で実施する場合、1人1項目しか書けないが、そのように規定する理由はどこにもない。授業でコツをつかんだ学生が有志として執筆してくれれば、仮に1項目の執筆に2か月かかったとしても1年で6項目の執筆が可能となり、ハンドブックの構築は大幅に進む。

また、授業においてコーパス検索技術を習得するためのプロセスは、教科書＋動画＋ワークシートで完全にオンライン化されており、授業を直接受講しなくても、ハンドブック記事を執筆できるだけの技術を習得できる下地は整っていると言える。

問題は書いた記事の質保証であり、授業ではゼミ形式でお互いの記事にコメントし、加筆修正を繰り返すことでこの部分を担保している。現時点では中俣が他の大学の授業においてもゲストで参加し、最終的なコメントをしているが、執筆者を有志にまで拡大した場合は、一人でこれを実施するのは難しい。そのため、2，3の記事を執筆した経験者には、記事を評価する側に回ってもらい、執筆とクオリティチェックの両面を有志で回すシステムを考えている。また、アップロード作業なども大学院生のRAに依頼することを考えている。

このような方法で、2028年度までに500から600項目の文法項目について解説を行い、実用に足る『文法コロケーションハンドブックE』を公開するというのが、2025年初頭時点での目標である。なお、この新しい『文法コロケーションハンドブックE』には「ハンドブック」ですでに発表した95の初級項目についても改めて記事執筆を行い、新情報を追加する予定である。

6　おわりに

この実践報告では、過去の「ハンドブック」のフォーマットに基づいて、大学院生がコーパスの授業の中で新しいハンドブックの記事を執筆するという実践について報告した。本実践が新しいポイントは大学院生がコーパス日本語学の授業で学んだことを活かし、直接社会に向けて役に立つ情報を発信するということである。このような情報は、もちろん研究成果を紀要や学術誌で発表することでも達成できるが、本実践では、「論文にするほどではないちょっとした、しかし日本語教師が授業を行う前に知っておきたい」情報を発信することができる。特に重要なのは、そのような小さな情報は「一か所に集積することで、初めて利用者の目に留まる」ということである。

現時点では30項目余りのPDFにすぎない（といっても100ページを超えるボリュームではある）が、今後は授業の枠を超えて執筆を加速させる。500から600項目のコーパスに基づいた文法解説書は、例をみない画期的なものになると予想され、広報を通じて世界中の学習者に利用して頂きたい。また、当初は電子版で公開する予定であるが、紙媒体の出版も考えている。

注

1）成果はhttp://nakamata.info/database/からダウンロード可能である。後述するように、現在はPDF形式で公開しているが、いずれは別のブログで発表する予定である。しかし、いずれにせよこのURLにリンクをもうける予定である。

2）ただし、この耳慣れない用語は筆者の不勉強によるもので、同様の概念は英語の構文研究においてCollostructionと呼ばれていることを出版後に知った。もっとも「コロストラクションハンドブック」という名前にして、日本で売れていたかどうかはまた別の問題である。

3）https://www.youtube.com/@中俣尚己の日本語チャンネル

4）なお、大学院生が1人1項目ずつ担当する形の文法解説書としては宮島・仁田(編)(1995)が前例として存在している。この内容もほぼ全て当時の大阪大

学大学院に所属していた大学院生が執筆したものであるが、学術論文における被引用数の多い項目も多く、また執筆者の大半が大学教員になっている。

5） 接続する語の異なり語数÷√その文法項目の延べ語数で計算される。

6） 実際、補助動詞「かける」には「呼びかける」のような働きかけの用法と、「言いかける」のような途中の用法があるが、前者の生産性指数は0.30で非常に低い一方、後者は8.75と比較的高いことが本実践の中で明らかになった (横田2023)。影山(1993)の分類に従えば前者は語彙的複合動詞、後者は統語的複合動詞ということになるが、両者は文法化という過程の中で連続したものとしてとらえるべきとすでに指摘されている (三宅2005)。生産性指数の情報の蓄積は個々の形式において文法化がどの程度進んでいるかを計量することにつながり、内容語と機能語の研究に貢献できる。

参考文献

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.

グループ・ジャマシイ(2023)『日本語文型辞典　改訂版』くろしお出版.

中俣尚己(2012)「コーパスに基づいた語彙情報つき文法ハンドブックの構想」『実践国文学』第81号，p.1-15.

中俣尚己(2014)『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版.

中俣尚己(2015)「初級文法項目の生産性の可視化──動詞に接続する文法項目の場合──」『計量国語学』29巻，8号，p.275-95.

中俣尚己(2017)「コーパス研究をどう教育現場に活かすか──文法コロケーションハンドブック執筆の背景──」『専門日本語教育研究』19号，p.3-10.

中俣尚己(編)(2017)『コーパスから始まる例文作り』くろしお出版.

中俣尚己(2021a)『「中納言」を活用したコーパス日本語学入門』ひつじ書房.

中俣尚己(2021b)「言語統計学入門(3)　──パーセンテージと比率──」『計量国語学』33巻，3号，p.205-213.

中俣尚己(2023)「話題別コーパスから話題別単語帳を作成する試み」『多文化社会と留学生交流』第27号，p.59-68.

三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化──内容語と機能語の連続性をめぐって──」『日本語の研究』1巻，3号，p.61-76.

宮島達夫・仁田義男(編)(1995)『日本語類義表現の文法』(上・下)くろしお出版.

横田彩子(2023)「かける」中俣尚己(編)『文法コロケーションハンドブックE』http://nakamata.info/database/

Stefanowitsch, A. and Gries, S.(2003) Collostructions: Investigating the interaction between words and construticons, *International Journal of Corpus Linguistics*, Vol.8, No.2, p.209-243.